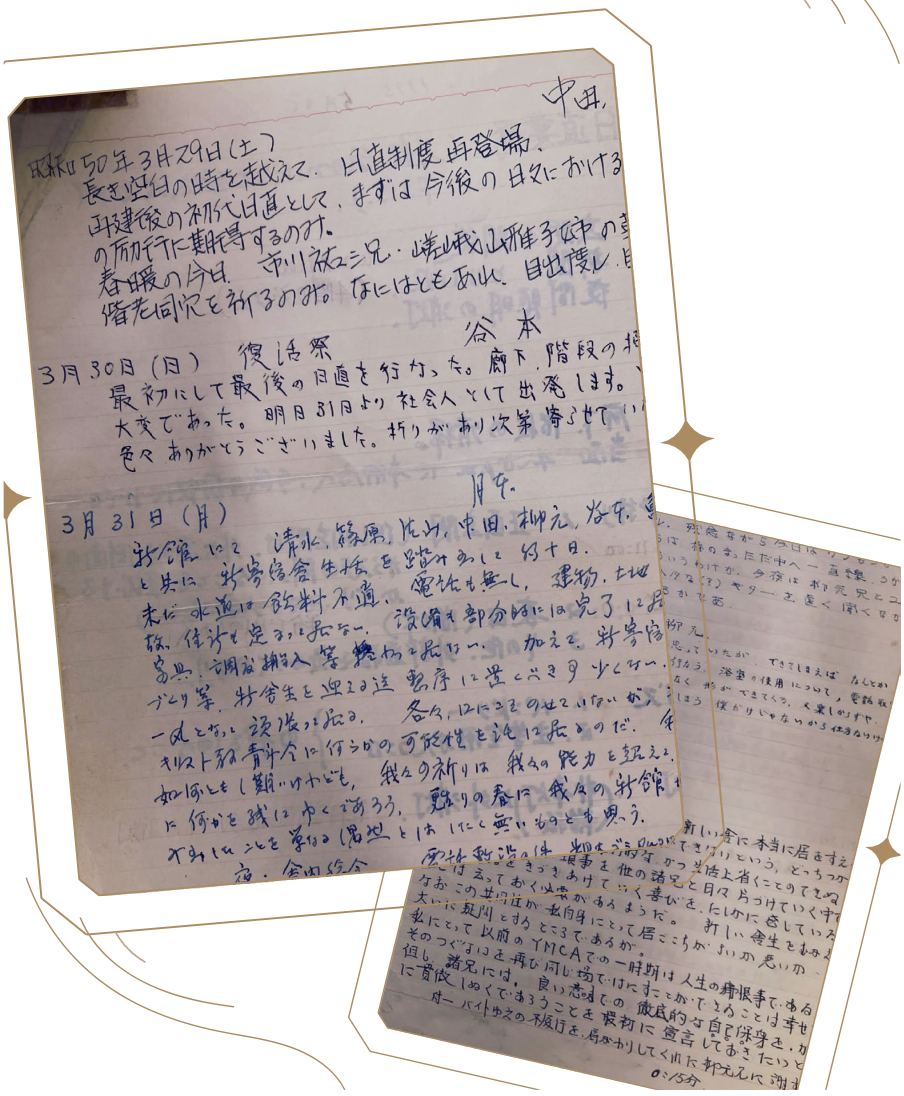
第 5 章

会館竣工 50 周年記念行事報告



公益財団法人

東京大学学生キリスト教青年会

会館竣工 50 周年記念式典及び祝賀会のお誘い

日時 2025 年 11 月23日 日曜日

14：30～ 16：30

記念礼拝

記念講演

17：00 祝賀会

記念礼拝



上田光正先生

テキスト：エフェソの信徒への手紙 2 章 14 ～ 18 節

説教題：「キリストはわたしたちの平和」

プロフィール：1942 年東京生、1960 年東大入学、東大 YMCA 入寮。巣鴨ときわ教会にて受洗、1966年東京神学大学大学院修士課程卒業、阿佐ヶ谷東教会副牧師、弓町本郷教会伝道師、1968 年東大大学院修士課程卒業（哲学）、1973 年ゲッチンゲン大学神学部博士課程卒業 帰国して安芸教会、若草教会、美竹教会、曳舟教会主任牧師歴任、現在伊東教会協力牧師。

著書：『カール・バルトの人間論』（日基教団出版局）、『聖書論』（同）、『日本の伝道を考える』（シリーズ本、1～5 巻、教文館）、『キリスト教の死生観』（教文館）、『カール・バルト入門』（日基教団出版局）、『バルトによる説教論』（同） 他。

記念講演

團 紀彦先生

演題「大地と建築と祈りの場」

建築家／都市計画家。1956年、神奈川県生まれ。

東大 YMCA 入寮 東京大学大学院修士課程、米イェール大学建築学部大学院修了。98年、愛知万博日本誘致案の作成に参画し、政府の旧来型開発手法を厳しく批判、海上（かいしょ）の森の環境保全に道を開いた。2020年から長野県軽井沢町の都市と自然環境保全のためのマスターアーキテクトを務める。代表作に日月潭風景管理処、台湾桃園国際空港第1ターミナル、日本橋室町東地区再生計画「コレド室町」、表参道HUGO BOSSなど。



祝賀会

参加費 5,000 円

東大学生キリスト教青年会 会館礼拝堂にて、飲食付きで行います。

ご参加は、下記、メールアドレス、または、事務局まで郵送にてご連絡ください。

E-mail: todai-ymca@nifty.com

住所 〒113-0023 東京都文京区向丘 1-20-6 東京大学学生キリスト教青年会

5-1　会館竣工 50 周年記念式典・祝賀会記録

公益財団法人　東京大学学生キリスト教青年会は、東京大学の学生（含大学院生）間にキリスト教を宣べ、かつ、その霊性、知性、身体、の発達を図ることを目的として、その中核となる事業として寄宿舎の設置運営を行ってきました。2025 年は、その基礎となる向ヶ丘寄宿舎が新寄宿舎として建て替えらえれ、竣工した 1975 年から、50 年という節目のとしとなりました。そこで、有志の発案により、寄宿舎の改修や、生活環境の改善の検討が始まり、あわせて、会館竣工 50 周年記念式典を開催する運びとなりました。



記念式典としては、上田光正先生をお迎えし、エフェソの信徒への手紙 2 章 14 節の御言葉「キリストはわたしたちの平和」と題して、記念礼拝をしていただきました。

==========

上田光正先生

1942 年東京生、1960 年東大入学、東大 YMCA 入舎、巣鴨ときわ教会にて受洗、1962 年東京神学大学 3 年編入、1966 年同大学大学院修士課程卒業、阿佐ヶ谷東教会副牧師、弓町本郷教会伝道師、1968 年東大大学院修士課程卒業（哲学）、　1973 年ゲッチンゲン大学神学部博士課程卒業（神学博士、「カール・バルトの人間論」）、帰国して安芸教会、若草教会、美竹教会、曳舟教会主任牧師歴任、現在伊東教会協力牧師。

==========

カール・バルト（弁証法神学や危機神学、あるいは新正統主義と呼ばれる 20 世紀のキリスト教神学に大きな影響を与えたスイスの神学者。ナチス・ドイツの政策に従うドイツ福音主義教会に対抗して結成された告白教会の理論的指導者。バルメン宣言の起草者）のもとに学び、追悼講演会にも参加した、上田先生から、ベルリンの壁は、象徴的な敵意という壁であったということ。

人間がなぜこんなに戦争が好きなのかということ。アベルとカインからつながる原罪。復讐という連鎖。万人の万人よる闘争。敵意という隔ての壁。キリストは私たちの平和でありますという聖書の言葉は、平和は、キリストの血が大地にそそがれ、人類の罪が贖われ、呪いを祝福に変えた。キリストの十字架だけが、平和の唯一の源である。ということお話いただきました。



また記念講演として團紀彦先生に、「大地と建築と祈りの場」というテーマでお話しいただきました。

==========

團　紀彦先生

建築家／都市計画家。1956 年、神奈川県生まれ。東京大学大学院修士課程、米イェール大学建築学部大学院修了。98 年、愛知万博日本誘致案の作成に参画し、政府の旧来型開発手法を厳しく批判、海上（かいしょ）の森の環境保全に道を開いた。2020 年から長野県軽井沢町の都市と自然環境保全のためのマスターアーキテクトを務める。代表作に日月潭風景管理処、台湾桃園国際空港第 1 ターミナル、日本橋室町東地区再生計画「コレド室町」、表参道 HUGO BOSS など。

==========

大地と祈りの場というのは、建築というものがなかった時代から、はじまること。トルコのカッパドキアの洞窟修道院では祈りの場が、地下都市まで作られている。アジャンターの石窟など、岩山と洞窟が修道僧の存在とあいまって祈りの場が形成されてきた。

キリスト教におけるゲッセマネの園建築の平面図では、バジリカ式教会＝マーケットと集中式教会がある。サンピエトロ大聖堂は、ブラマンテから、ミケランジェロ、ラファエロ、ベルニーニとつながる設計者の中で、集中形式からバジリカ形式がつながってきた。フィレンツェのサンタマリア大聖堂など、この時代からコンペティションが始まって、建築家の名前が残り始めたこと。ギベルティとブルネレスキがフィレンツェのサンタマリア大聖堂の二重ドーム構造でコンペになった逸話。ゴシック建築は何故イタリアにないのかという疑問と、フン族のアッティラの侵入とゲルマン民族の大移動により作ったゴート族の建築がゴシックではないかという仮説。ゴシックのカテドラルは周りの街並みになじまない。ローマの街並みは壊せず、自分たちの象徴を作ったのではないかというモニュメンタリズムの系譜。

日本の建築と宗教の関係では、仏教的ではない建築物の事例として、柴又帝釈天、京都太秦の広隆寺、宇治の平等院鳳凰堂の解説。私の建築として、共生媒体という考え方や、祈りをテーマにしたモニュメントについてお話しいただいた。





式典後の祝賀会は、現役舎生も含めて、約 50 名の参加で、寄宿舎の礼拝堂が満員となる大盛況でした。式の冒頭の月本昭男理事長のご挨拶からはじまり、冒頭には、プロのミュージシャンに委嘱した、クリスマス祝典にふさわしい音楽のアレンジ演奏（ヴォーカル　尾崎久美子姉、ピアノ宮澤由衣姉）ではじまり、その後、食事をしながら、OB 先輩諸兄から想い出を語っていただきました。

最年長で、1987 年から 37 年間にわたり、役員をお願いした二神康郎兄。旧舎の設計をされた遠藤新先生の係累であられる関澤純兄。新舎建替の時の学生主事、榊原博之兄。新舎と旧舎の両方で生活をされた現専務理事の篠原正雄兄、清水正之兄。さらに 50 周年記念事業として、記念誌の刊行や、宿舎の改修に取り組まれている山口栄一兄、合田隆史兄。当会と長くともに歩んできた賛育会の元理事長、小堀洋志兄。当会の歴史を感じさせる面々から、多彩なお話が飛び出し、興味尽きない会となりました。最後は、現役舎生の明るい自己紹介で締めくくり、豊かな一日となりました。

（高倉　鉄夫）

5-2　50 周年記念講演会記録

「大地と建築と祈りの場」

圍 紀彦（1979 年工学部卒）

私は東大 YMCA に 1977 年から 79 年までお世話になりました。山口先輩からお声がけいただき 40 数年ぶりに舎を訪れましたが、当時と変わったところも変わってないところもあり、大変懐かしく思いました。77 年にお世話になったとき、私はキリスト者ではなかったにもかかわらず暖かく迎えていただきました。当時は 3 人ずつ入舎が許可され、一緒に入ったのは田浦さんと星野さんでした。私はずっと建築に携わってきましたので、本日は建築という立場からキリスト教や祈りについてお話ししたいと思います。

大地と祈りの場



大地と祈りの場のつながりは、建築が発達する以前からあったように思います。キリスト教にとって祈りの場の原点といえるものは、おそらく左の絵にあるゲッセマネの園でしょう。

真ん中の写真はトルコ・カッパドキアの岩窟修道院です。3 世紀から 13 世紀まで使われたようですが、ここでは紀元前 4000 年という気が遠くなるような昔からヒッタイトの人たちが岩をくりぬいて住んでいました。それが岩窟修道院になったという、人が地形を利用して祈りの場を作ったという実例です。彼らは地下都市を建設してローマ帝国やイスラム勢力からの迫害に耐えたという歴史もあります。こうした場所には多くのキリスト教絵画が残されており、そのうちのいくつかは偶像破壊の対象となり顔がスクラッチされていたりします。天井に描かれたイコンはその後のキリスト教会に見られる天井画につながるものを感じさせます。

こうした岩窟を祈りの場とした例は仏教にも見られます。シルクロードにある仏教の岩窟遺跡には大変保存状態がいいものがあるのですが、なぜ人々が岩の中を祈りの場としたのかは建

築家として興味が持たれます。

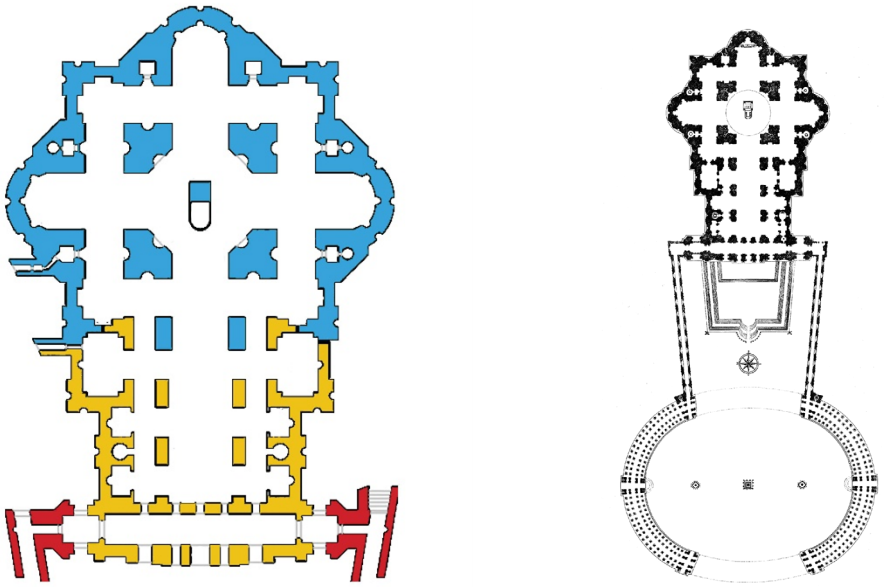


右はシリアにあるシメオン修道院の元となった聖シメオン・スチュリテスが塔にこもって 40 数年間祈ったという絵です。アシジの聖フランシスコも修道士として活動し、のちにそれを記念する大きな教会が建てられました。こうした孤立して黙想し個人として尊崇を集めた人たちと大きな教団との関係というのは、仏教の場合を含め外からはなかなか見えてこないのですが、私は興味を持っています。

集中式からバジリカ式へ

次に教会堂の平面図の話をします。いま一番流布しているのはバジリカ式の教会堂ですが、どうも集中式のほうが少し古いようです。建築用語でバジリカというのは二つの意味がありまして、ローマ時代のマーケットの廃墟もバジリカです。ネロの時代の迫害から解放されたキリスト教徒がマーケットを教会堂として使い始めたという説があり、私としても調べたいと思っています。バジリカの平面図を見ますと、真ん中に身廊が通っていてその両側に側廊があるのですが、その側廊に八百屋などが店を構えていたマーケットになっていたと思われます。正面のアプスには、コンスタンティヌス帝がキリスト教を公認する前ですので、お線香を焚くような土俗的な宗教儀式の場所があって興味深いです。

集中式の教会堂として私がいつも素晴らしいなと思っているのはラヴェンナのサンヴィターレ聖堂です。ですが集中式聖堂には正面が作れないという大きな問題点があります。大勢の信者を前にして聖職者が話をする時に劇場的な空間を作りにくい、また聖職者が天を仰いで祈るとき、誰かを背にしなくてはいけないということになります。そういう現実的な問題に対してどうするかということで悩んだ形跡があります。一方イスラム教のモスクは十字架やキリストの像といった象徴を完全に排除してモスクの方向に向かって祈るだけですから、構造的にはまったく違うものになります。

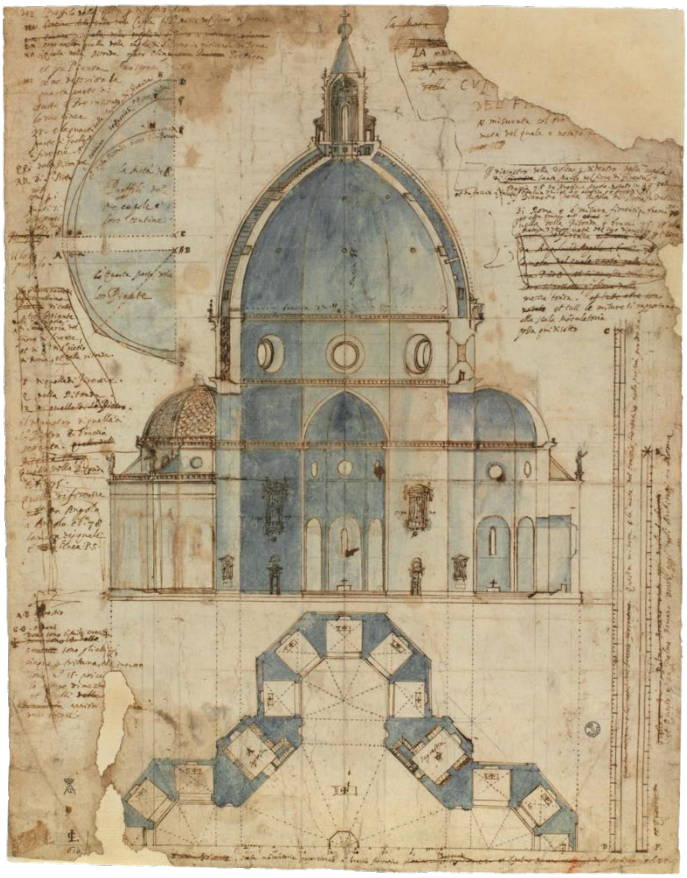


サンピエトロ大聖堂の平面形式の変遷

バチカンについてですけど、16 世紀のはじめにはサンピエトロの原型がありました。しかし老朽化がひどいのでユリウスⅡ世の時に再建することになりました。当時いたルネサンスの巨匠たちを起用し、120 年くらいかけて完成に導きました。この平面図を見ると、もともとは集中式だったことがわかります。つまりギリシア十字からラテン十字へと変化していったわけです。ここでサンピエトロの建設に関わった人たちを紹介したいと思います。ブラマンテという人がローマ教皇から依頼を受けた初代の建築家でした。この人は集中式の会堂を設計しました。それを引き継いだのがミケランジェロです。ミケランジェロはブラマンテの集中式を構造的に強化して、上に大きなクーポラを載せる形にしました。そして大きなクーポラを支えることができる太い柱を設計しました。ここまでが平面図の青い部分です。次に登場するのがラファエロであり、彼は集中式ではダメだと考えて長い身廊を設計しました。平面図の黄色い部分です。こうしないと教会の正面が立派にならない、またミサもやりづらいという現実的な問題を解決するためでした。残念なことにラファエロは若くして亡くなったのですが、バチカンは投票でこの設計思想を採用しました。ベルニーニはそれから 100 年くらい後、バロックの時代に登場します。彼はサンピエトロの正面に大きな楕円形の広場を付け加える設計をしました。ミケランジャロがサンピエトロの構造を強化したというのはあまり知られていないことですが、そのために使った太い柱で生じたニッチにピエタの彫像が置かれました。このように構造的な強化と彫像の配置が表と裏の関係になっているのはとても興味深いことです。

ところでここにダヴィンチが登場しないのはなぜだろうと思って調べたことがあります。す

るとどうやらダヴィンチはミケランジェロとかなり仲が悪かったようだということが分かりました。ダヴィンチはとても売り込みが上手だったようですが、教皇はむしろ地味なミケランジェロを選んだというのが面白いところです。ミケランジェロはシスティーナ礼拝堂の天井画を任されましたが、いやいやながら引き受けたようです。自分は彫刻家なのにどうしてという思いが強く、また非常に制約のある条件の中で描く必要がありましたが、大胆な省略やデフォルメを用いて生き生きとした人物画に仕上げているのはすごい天才だなと思います。ミケランジェロというとダビデ像を思い浮かべる人が多いと思いますが、彼は優れた建築家でもあったわけです。



サンタマリア大聖堂のクーポラ

ルネサンスというのは裸体を描くなどある意味反宗教的な面を感じさせますが、これは長く続いたペストから人々が光を求めたことの表れではなかったかと思います。そしてギリシアに素晴らしいものがあったではないかという気づきがあったでしょう。もうひとつ十字軍の遠征でサラセンの先進的な技術が入ってきたという影響も見逃せません。ルネサンスはまた建築家がはじめて個人名として登場する時代でもあります。

フィレンツェのサンタマリア大聖堂はバチカンの 100 年くらい前にできたものですが、平面図を見ると中心が 8 角形であり、集中式会堂に身廊と側廊が付いた形になっています。すなわちサンピエトロの原型になっているような形式がここに見られます。これは有名な話ですが、ブルネレスキとギベルティというふたりの建築家が腕を競い合いました。洗礼堂の扉のコンペティションではふたりの技量が甲乙つけがたいということで、ふたり共同で製作するようにという話になりました。しかしそれはやはり無理な話であり、プライドの高いブルネレスキが辞退しました。つまりギベルティが扉の彫刻を製作することになったわけです。そのあとサンタマリア大聖堂のコンペがあったのですが、ブルネレスキは 3 度も審査会場からつまみ出されました。それはなぜかというと巨大なクーポラの内側にもうひとつクーポラを設けるという非常に大胆な提案をしたためでした。そうすることで大きな足場を組まずに作業ができるというわ

けです。しかし審査員の中には建築家もいて、そんなことは不可能だとブルネレスキを審査会場からつまみ出したのです。一方ギベルティは世慣れた人で、フィレンツェの職人組合を味方に付けていました。ギベルティは会堂のどこを誰が設計するかという差配権を握り、自分はクーポラをブルネレスキは１階周りの平面を担当すると決めました。ところがギベルティが原寸大の模型を地面に作り市民に見せていた折、強風が吹いて模型が壊れてしまいました。その大崩壊の様子を見ていた職人組合長は、このままでは自分たちの命が危ないと思ったのでしょう、ブルネレスキのところに来て陳謝したということです。そのためブルネレスキが上から下まですべて設計することになったのですが、彼が一番幸せそうだったのはふたつのクーポラの間の薄暗い狭い空間の中で仕事をしていた時だったという話が伝わっています。このようにルネサンスというのは、人の表情が見える時代だったということができます。

モニュメントとしての建築

次になぜゴシック建築がイタリアにあまりないのかという話をしたいと思います。これはアッティラという５世紀の人、匈奴系であるフン族の族長ですが、彼がゲルマン民族であるゴート族を支配下に置いて北ヨーロッパに入ってきたのが民族大移動の引き金だったと言われています。その後非常に大きな玉突き現象が起こったわけですが、面白いことに西ヨーロッパに攻め込んだ東ゴート族が通ったルートに大きなゴシック建築が建っているのです。たとえばストラスブール、ケルン、アミアン、ボーヴェなど。そもそもゴシック／ゴチックというのは「ゴート族の」という意味なのですが、どうしてゴート族が攻めてきたラテン（古代ローマ）の町に大きなゴシックのカテドラルができたのか大変興味深いので、きちんと調べてみたいと思っています。



ロンシャン礼拝堂

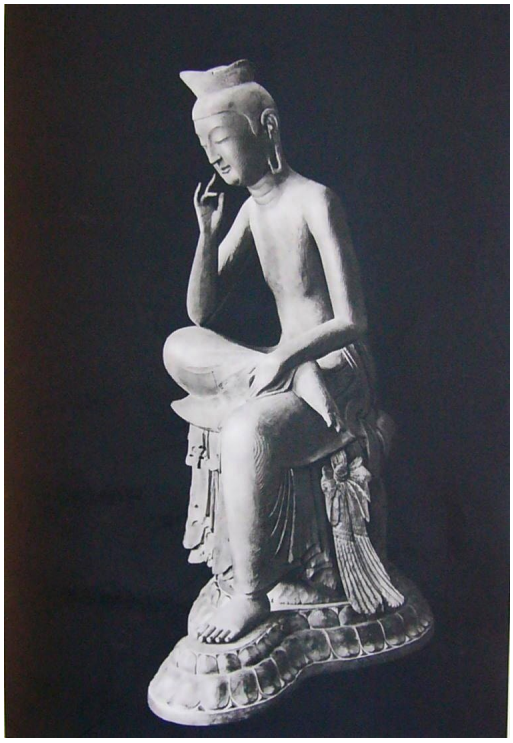
このゴシック建築というのは周りの町並みとつながろうという痕跡がまったくないんです。ゲルマン民族は戦闘的に入ってきたのか平和的に入ってきたのか分かりませんが、ローマの都市は壊せなかったんですね。ゴート族はやがて賃借人としてローマの都市に定住していくのですが、ある種の置き土産としてまた自分たちが東から来た証（あかし）のモニュメントとしてゴシック建築を残したのだと私は想像しています。

こういうモニュメンタリティの系譜というのは現代建築の中にもあって、シドニーのオペラハウスやビルバオのグッゲンハイム美術館などがいい例です。とにかく目立つインパクトのあるものを町の中に作るということですが、逆にそんなものは要らないからきちんとした町並を作ろうという考え方もあり、両者はせめぎあっているのですが、いずれにしてもモニュメンタリティの系譜の原点がゴシックにあると私は思っています。ル・コルビジエのロンシャン礼拝堂にもモニュメンタリティはありますが、その程度はさほど強くなく、どちらかというとロマネスク的な壁の厚みを感じさせます。これは現代建築ですが、素晴らしいキリスト教建築物だと思います。

奇妙なお寺

大航海時代に入ると宗教改革が起こり、キリスト教界として極めて大きく重要な議論が戦わされました。この東大 YMCA もプロテスタンティズムの流れをくむものでありますが、その一方でスペイン、ポルトガル（といったカトリック勢力）は危機感を持って世界を視野に入れた布教を開始します。両国は世界を半分ずつに分けるという極めて勝手な取り決めをしたため、日本に最初にキリスト教を布教しに来たのはポルトガル船でした。

ここから宗教と建築についてお話ししたいと思います。柴又の帝釈天はヒンドゥーの神様を祀ったものですが、外観は仏教のお寺にしか見えません。逆説的に考えるとこの時代あるいはさらに古い時代に海外から他の宗教が入ってきたとすると、日本はまれびと（稀人）信仰といって外から入ってきた人をすぐには排除しない国であり、ザビエル以前にキリスト教が伝わったと仮定すると、建材として石もないしお寺に近いものを建てたのではないかと想像します。帝釈天も外観はお寺なのですが、中に入ってみるとやはり違うものを感じます。いつかインドの人に見てもらって感想を聞きたいと思っています。



広隆寺弥勒菩薩半跏思惟像

私が日本のお寺の中で、これはお寺ではないんじゃないかと建築的に感じるものをふたつほど紹介します。そのひとつは京都・太秦にある広隆寺です。ここには有名な弥勒菩薩像が安置されています。当時中国（唐）ではネストリウス派のキリスト教が大変流行していて、大秦寺と呼ばれていました。大秦というのは中国語でローマという意味であり、要するにローマ寺で

す。広隆寺を建てたのは渡来系の秦一族ですが、広隆寺の伽藍配置などを見ると普通の寺とはかなり違うものを感じます。またユダヤの紋章のようなものが入った井戸があるのも不思議です。もし渡来系の文化が入ってきていても日本ではオリジナルの石でできた建造物を作ることはできなかったでしょう。太秦の太いという字の点を取ると大秦になるわけであり、私としてはとても興味深く思っています。またここにある弥勒菩薩像ですが、弥勒菩薩は釈迦の入滅後56億年後に地上に現れるとされる今は存在しない仏、いわばメシアです。私はこれを一種の仮託のように感じています。仮託というのは仮に託すという意味であり、あるものを人々にとってなじみのあるもので表現することです。ザビエルは日本人の通訳であるヤジロウと、日本でどのようにキリスト教の神を説明しようかと議論しました。その中で大日如来のような存在だということにした時期があります。あとになってこれは違うだろうということで止めたわけですが。こうした仮託というのは宗教でしばしば登場します。ですから弥勒菩薩の場合もそうしたものではなかったかと推測しているわけです。

もうひとつが宇治の平等院です。平等という字が仏教寺院に付けられることはごくまれであり、藤原頼通の強い意志によって平等と付けられました。道長のころから西方浄土が強く意識されるようになったたわけですが、西方浄土、極楽浄土というのは元々の仏教にはなかった概念です。ひょっとしてここにもキリスト教の影響があったのではないかと想像しているのですが、これについてはしっかり調査してからお話ししたいと思います。

そこにあるものを生かす

最後に私が関わった建築についてご紹介したいと思います。これは京都の西京極にある市のスケートリンク兼スイミングプールです。冬場はスケートリンクにするので、地下に大きな機械室を設けないといけない。そこで計算してみると9万 m^3 もの土をダンプカー2000台ほど使って搬出しなくてはいけないことが分かりました。周囲は住宅地ですので、搬出した土はどこか遠方の港湾の埋め立てに使うようなことになるわけです。ですからなるだけ土の移動を少なくしたいと思っていました。一方建築物は18万 m^3 くらいの容積と計算されるのですが、私はルーが9万 m^3、具が18万 m^3 ある27万 m^3 のカレーを想像して、



京都西京極　京都アクアリーナ

そこから始めてはどうだろうかと考えました。つまり土は誰かがどこかに捨ててくれるというのではなく、その場で使うという考えでやってみるのもいいんじゃないかと思ったわけです。日本は平野部が国土の 20%ほどしかありませんから、里山を削って造成工事するというのが常でした。しかしこれからそういったやり方はどんどん難しくなってきます。

次にご紹介するのは台湾の日月潭（にちげつたん）風景管理処というものです。これは 1999 年に台湾南投県で起きた大地震による土砂崩れの現場跡地を記念館と環境管理センターにするという取り組みでした。日月潭という美しい人造湖とその周辺の景色を調和させかつその場の土をなるだけ利用するような設計をしました。建築というのは元々あった自然を奪ってその上に建てるのが常だったのですが、私はむしろ自然を返したいと思いました。

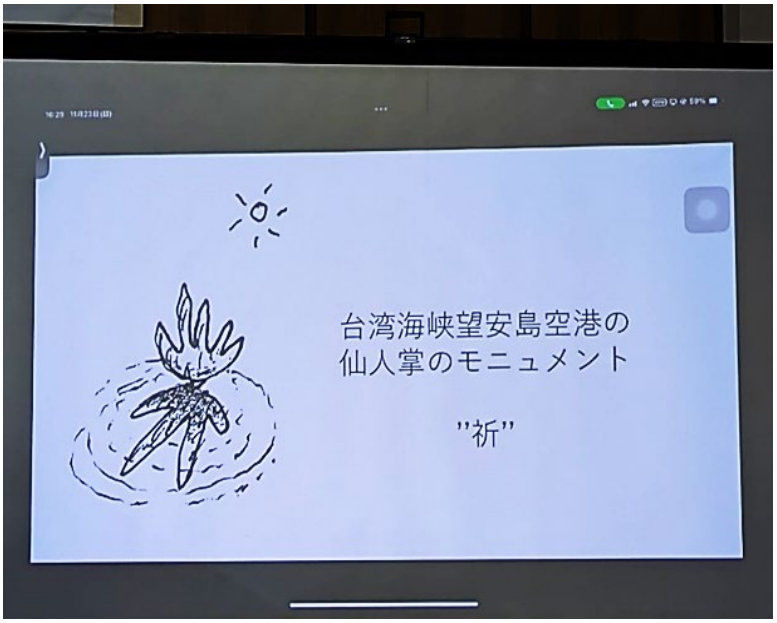


台湾桃園国際空港第 1 ターミナル

こちらの写真は桃園の国際空港第 1 ターミナルですが、これは改修のプロジェクトです。この空港が 1979 年にできたときは旅客数 500 万人を前提としていたのですが、あっという間にオーバーキャパになりました。2000 年時点ですでに 1000 万人となり、今後を見込んで 1500 万人が利用可能な空港を新設するかあるいは改修でそれを実現するかという話になりました。我々は改修を選択したのですが、具体的には大きな屋根を作って空港ビルの外側を内部化し、耐震補強することで要請に応えるものを完成させました。信じられないかもしれませんが、改修だと新築に比べてコストが 1/15 なんです。ですから環境保護的にも良かったと思います。

我々はどういう仕事をしているのかを考えてみますと、過去にある糸と未来の糸をつなぐ仕事なのではないかと思います。過去のものを全否定せず、将来の糸とつなぐべきものを選択してつなぐという仕事です。いわば第一章に続く第二章を作り、第二章を読んだ人が、ここまで

読んでよかったと満足してもらえればいいわけです。



最後に台湾海峡にある望安島での仕事の話をして締めくくりたいと思います。望安島というのは台湾海峡にある澎湖群島を形成する小さな島なのですが昔から海難事故が多く、明朝最後の将軍である鄭成功が航海の安全を祈願して名付けたとされています。つい最近のことですが、私は望安島にプロペラ機発着用の小さな空港を設置するプロジェクトに参画することになりました。この空港とともにモニュメントの設計も担当することになったのですが、私が提案したのは「祈（いのる）」と題した架空のサボテンです。望安島にはたくさんのサボテンが自生しており、サボテンは中国語で仙人掌、すなわち仙人の掌（たなごころ）と書くところから発想しました。サボテンには色々な種類がありますが、これは５本の指をイメージした架空のサボテンでして、スライドにお示しするのは光が差すと影ができるというイラストです。どの宗教も祈るときには必ず手を使うわけであり、望安島の名前の由来にもちなむ、祈る心を形にしたモニュメントを設計しました。

今日は「祈りの場」ということで、本筋としてはキリスト教における祈りの場である教会の建築物、そしてその原点が建物の外、すなわち大地にあったのではないかというお話をさせていただきました。

Q&A

（山口）私は東京と京都、半々の生活をしているのですが、京都の桂にあるアクアリーナには何度も行ったことがあります。行くと何故か心が安らぐのですが、これを設計されたのが團さんだと知り、大変驚き嬉しく思いました。なぜ安らぐのかなと考えると、あの緩やかな曲線、そしてモニュメントとして主張するのではなく京都の町に溶け込んでいるからではないかと思いました。質問ですが、團さんはこうした様々な建築物をどうやって思いつくのでしょうか、それは朝なのか夜なのか、といったことを含めてお聞きしたいと思います。

（團）先輩がアクアリーナのことをご存じだというのは私としてもうれしく思います。ここでお世話になった学生のころは、建築というのがイメージ先行であり、建築家は湯水のようにア

イデアが湧いてこないとだめなんだろうなと思いこんでいて、むしろ別の道に進もうかと思い悩んだ時期もありました。しかしそのうち、実は現実的な解を導き出すところで色々なやりかたがあると考えるようになりました。たとえば土を捨てるにしても実際に捨てている現場の事は知らないわけで、捨てずに済むやり方があるんじゃないか、そのほうがいいんじゃないかと思うとその方向で考えが進むわけです。あ、どちらかというと朝です。

（榊）私は室町の COREDO を色々な用事でよく使っているのですが、團さんの作品だということは数か月前に知りました。質問ですが、私ぐらいの年になると古い味わいのある大学の建物がなくなっていくのが寂しく思われます。戦後できた建物には味わいのないものが多く、何とかならないものだろうかという思いを持っていました。この先日本の大学の建物を作るにあたって、長い年月に耐えるたとえばオックスフォードのカレッジのようなものを実現させるにはどうしたらいいとお考えでしょうか。

（團）私は青山学院大学で 8 年ほど教えていたことがあります。青山のキャンパスにはツタが絡まっていてもおかしくないネオクラシックの小さな建物があるのですが、現代建築だとツタが絡まると廃墟感しか出ない、その違いは何なのだろうかと学生と議論したことがあります。車にツタが絡まっていたらスクラップですよね。私は現代のインダストリアルデザインが最も影響を及ぼしたのは建築だと思っています。現代建築の中で上手に年を取ることのできるものがない、これが一番大きな問題だと思うんです。新古典主義的な、たとえばオックスフォード、ケンブリッジ、私が留学したイェールもそうですが、こういった建物を設計できる人がもう世界中でいなくなってしまいました。日本人の建築家なら茶室ぐらい作れるだろうと思うわけですが、実はできる人がいないんです。それでも東京大学の中には古い建物が少し残っています。たとえば化学科でしたっけ、有機溶媒のにおいが漂ってくるような雰囲気の。私は大学にはそういう建築物があるべきだし、そのためには設計できる人を養成すればいいんじゃないかと思うんです。表面的に模倣したものではなく本物を見て、それをきちんと画にできる人が、たとえ 100 人にひとりであっても出てくれればいいなと思っています。

（柿谷　均）